

鶏卵



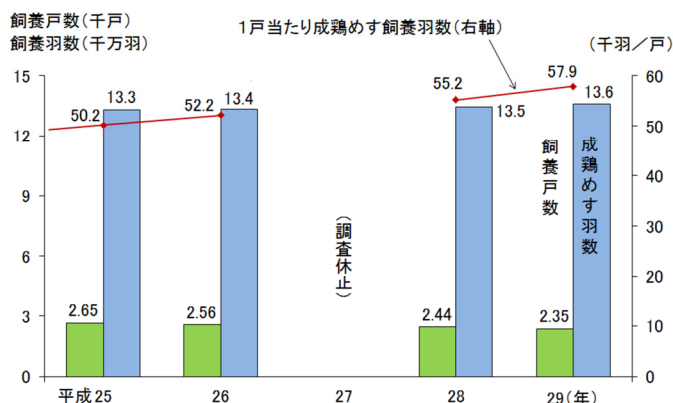
◆飼養動向

29年2月現在の採卵鶏飼養羽数、1.7%増加

採卵鶏の飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に前年より90戸減少し、平成28年は2350戸（前年比3.7%減）となった。一方、飼養羽数は1億7637万羽（同1.7%増）となった。このうち、成鶏めす飼養羽数は、1億3610万羽（同1.1%増）とわずかに増加した。成鶏めすの飼養戸数および飼養羽数を飼養規模別に見ると、飼養戸数は全ての階層で減少した一方で、飼養羽数は飼養規模の大きい階層を中心に増加した。

この結果、1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は前年から2700羽増の5万7900羽（同4.9%増）となり、大規模化が進んでいる（図1）。

図1 採卵鶏の飼養戸数および成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」

注1：各年2月1日現在。なお、29年は概算値。

注2：成鶏めすとは、種鶏を除く6カ月齢以上のめすをいう。

注3：飼養戸数は、種鶏およびひな（6カ月齢未満）のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽未満の飼養者を除く。

注4：平成27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

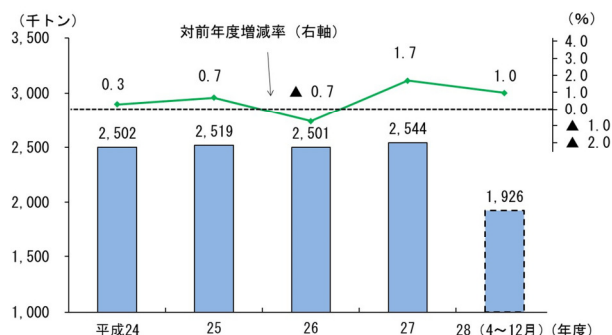
◆生産

28年度の生産量、1.0%増加

鶏卵生産量は、近年、250万トン台で推移しており、比較的安定している。

平成26年度は、250万1184トン（前年度比0.7%減）とわずかに下回ったものの、27年度、28年度（4～12月）は、近年の好調な鶏卵相場を受け、生産者の増産意欲が高まっており、それぞれ254万3640トン（同1.7%増）、192万5691トン（前年同期比1.0%増）といずれもわずかに増加した（図2）。

図2 鶏卵の生産



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：平成29年1月以降のデータは未公表。

◆輸入

28年度の輸入量、16.7%減少

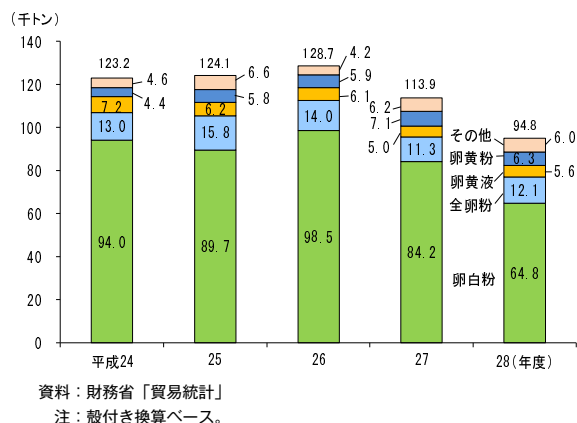
鶏卵の輸入量（殻付き換算ベース）は、国内需要量の3～5%程度を占めており、ほとんどが業務・加工用として利用されている。輸入量の約9割が保存性や輸送コストに優れた粉卵であり、過半を占める卵白粉については、ハム・ソーセージのつなぎ原料や即席乾燥麺などに使われている。

平成26年度は、国産の相場高を背景に、一部の加工用需要が輸入品へシフトし、12万8700トン（前年度比3.7%増）とやや増加した。

27年度は、米国での高病原性鳥インフルエンザの発生などもあり、11万3900トン（同11.5%減）とかなり大きく減少した。

28年度は、米国产の輸入量が回復傾向にあったものの、卵白の国際価格が上昇したことから、9万5000トン（同16.7%減）と10万トンを割り込んだ（図3）。

図3 鶏卵の輸入量



◆消費

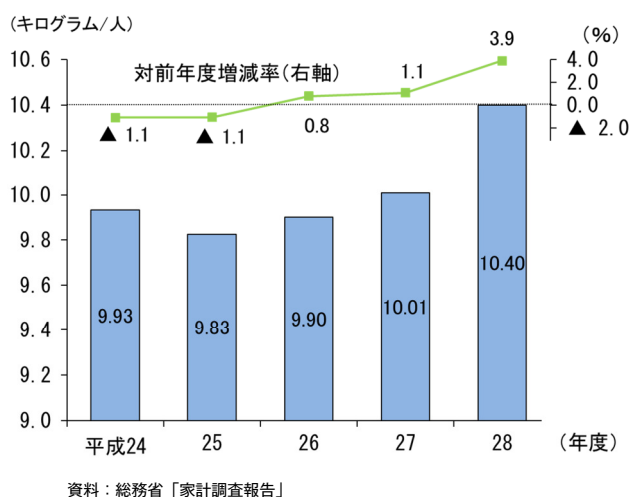
28年度の1人当たり家計消費量、3.9%増加

家計消費量は、年度により変動はあるものの、おおむね安定的に推移している。

平成26年度は、前年度と比較して、夏場の気温の高い期間が短く、消費の落ち込みが少なかった影響もあり、年間1人当たり9.90キログラム（前年度比0.8%増）と5年ぶりに増加した。

27年度以降は、テーブルエッグや、コンビニエンスストアなどで販売されている卵加工品の需要増を受け、比較的好調に推移しており、27年度は同10.01キログラム（同1.1%増）、28年度は同10.40キログラム（同3.9%増）と2年連続で10キログラムを超えた（図4）。

図4 鶏卵の家計消費量（年間1人当たり）



◆卸売価格

28年度の卸売価格、4年連続で200円台を記録

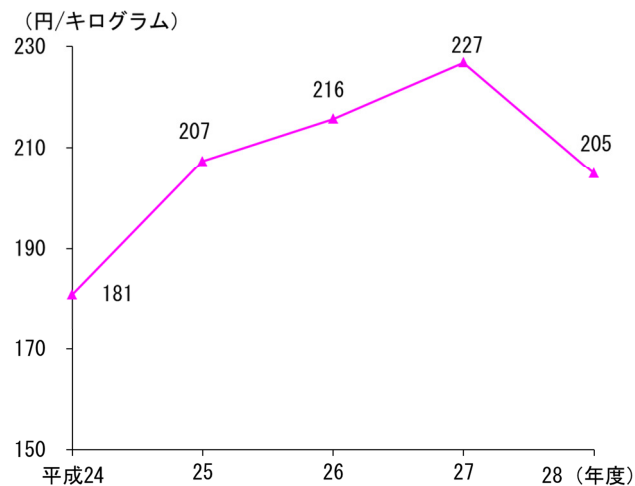
鶏卵卸売価格（東京全農系 M）は、夏場の不需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。

平成26年度は、生産量が減少した一方で、4月以降の消費増税により支出実額が増加したことに加え、食料品価格が全般的に上昇する中、安価な鶏卵への代替需要が高まったことから、1キログラム当たり216円（前年度比4.1%高）となった。

27年度は、鶏卵を使用したデザートやマヨネーズなどの加工向けを含めた旺盛な需要を背景に、同227円（同5.1%高）と前年度をやや上回った。

28年度は、生産量が増加しているものの、引き続き需要が好調なことから、同205円（同9.7%安）と4年連続で200円台を記録した（図5）。

図5 鶏卵の卸売価格（東京全農系M）



資料：JA 全農たまご株式会社「月別鶏卵相場」

注：消費税を含まない。